
黒い刺青

中間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い刺青

【Nコード】

N7694Y

【作者名】

中間

【あらすじ】

化け物と恐れられ孤独に生きてきたリクトは、いきなり異世界に送られることになる。

何も使命を与えられなかったリクトは山奥で静かに過ごしていたが、ある日、山で迷っていた二人の獣人を助けたのをきっかけに、色々な話に関わっていく。

主人公は、ちょっとチートな力を持っています。予定ではハーレムになる予定です。文章が拙いので、暖かい目で読んでくれるとありがたいです。

プロローグ 前世界と神様

ここは町郊外にある工事現場。そこでは大人に混じって、中学生の少年が泥にまみれて働いていた。

「リクトくん、今日はもう上がっていいぞ!」

現場監督が、大きな声でリクトに上がるように伝える。

「はい」

近くの中学に通う中学3年生の滝風^{タキカゼ} 陸刀^{リクト}は、監督の好意で工事現場でバイトをさせてもらっている。遊ぶためではなく生活費を稼ぐためだ。

8時くらいに帰途についたリクトは、夜の9時を回った頃に自宅に帰ってきた。帰宅途中のコンビニで弁当を買う。

「ただいま」

部屋に入っても誰の返事もない、当たり前だ一人暮らしなのだから。中学生の身で一人暮らしをしているのは、学校が遠かったからとかではなく、親がリクトを遠ざけるために買ったマンションに、自ら引っ越したからだ。

リクトの持つ特殊な力か体質かはわからないが、リクトはこの世界で異常な存在だった。リクトの力を恐れた両親は、リクトが小学校5年生の時に殺そうとした。しかし殺害は失敗に終わり、それをきっかけにリクトの家は崩壊を始めた。父はリクトに対して卑屈になり、母は幼い弟の育児を放棄して外泊が増えた。中学に上がった頃、

リクトから両親に一人暮らしをすることを条件に、マンションと弟の育児を要求したのだ。

両親でこれだ。リクトに友人と呼べるのは一人もいなかった。良くしてくれているバイト先の監督は、ただリクトの異常性を知らないだけだ。

リクトを知る者ほぼ全員が、リクトのことを『化け物』と呼んだ。

リクトの異常性を知って、普通に接してくれているのは、弟の浩太^{コウタ}くらいなものだ。

帰宅の言葉が宙に消え、心には空しさだけが残った。

そこには他者に、対する怒りはない。自分の力を理解しているリクトにとって、自分の力をもっとも忌むべきものだったからだ。他人は力の表面を見ただけで恐怖する。もし本質まで知ったらどうなるか想像もつかない。

リクトは、コンビニ袋から弁当を出す。いつもは自炊をしているが、帰りが遅いときはコンビニ弁当に頼っている。遅めの夕食を済ませると、今度は図書館で借りてきた本を読み始める。お金のないリクトにとって、唯一の暇つぶしだ。リクトが外で暇を潰そうとすると、リクトの色々な噂を聞いた不良が集まってくる危険があるのだ。だからバイトも郊外のバイトを選んだし、いつも図書館で本を借りて、暇を潰しているのだ。

読む種類は様々で、今は内容の軽い医学書を読んでいる。この前は物語の本、その前は経営学の本、その前は建築関係の本を読んでいた。3年間の読書は、リクトに幅広い知識を蓄積させることになり、これからの人生の助けとなった。

リクトは、読書を切りの良いところでやめ、一人で眠りについた。

いつの間にか何もない白い空間にいた。自分が異常な存在なため、不思議なことには耐性があるつもりだったが、これには驚いた。

「なんなんだ、夢？」

「まあ、そんなところよ」

何もない空間から女が現れた。この時は、驚きより怒りが勝^{まさ}った。

「俺の前に、その姿で現れるな！」

その女の容姿は、小学生時代の恩師のものだった。恩師は既に、亡くなっている。

「ごめんなさい。この人が、もっともあなたに影響力を持った人だったから」

恩師ではないナニかは、身体を回転させて、今度は名前も忘れたクラスメイトの女子に姿を変えた。

リクトは、またしても不思議な現象を見せられ、少しだけ落ち着きを取り戻した。

「何なんだ、あんたは？」

「まあ、あなた達で言うところの神様よ。まあ神様といっても、世界の管理者みたいなものなんだけどね。」

「その神様が何のようだ。まさか雑談に来たわけじゃないんだろ。」

「そのまさか、実は雑談しに来たのよ。」

「……………」

「コホン。それじゃあ、今から本題を話すわね。」

なかったことにするらしい。自称神様が本題に入る

「あなたには異世界に、行ってもらいます。拒否はできません。行き先はファンタジーな世界です。」

「ま、待て。なんで俺が異世界に行かなきゃならない？」

「それは本来あなたは、この世界に存在すべき人間ではないからよ。」

存在するべきではない、だと

「それは、どういう、意味だ」

「本来あなたは、何処かのファンタジー系の世界で、生まれる筈だったのよ。それがなにかの手違いで、この世界に生まれてしまった。見つけるのに苦労したのよ。」

「……………」

やれやれといった様子の神様だが、リクトは言葉を無くして呆然とする。

それも仕方ない、神様はたった今リクトの存在を全否定したのだ。この世界にお前の居場所はない、そう告げたのだ。人間に存在を否定されたことは数あれど、神様や世界にまで存在を否定されたのは初めてだ。

「元氣出しなさいよ。そのための異世界行きよ。」

確かにそうなのだろう。今となつては今の世界に帰ることが辛い。元々リクトには、居場所のない世界だったのも事実だ。

「それに、この異世界行きは悪いことばかりじゃないわ。限定的だけど、あなたの力を封印してあげる。」

「ほ、本当か？」

突き落とした後で拾い上げるところに、黒さを感じさせるが、リクトにとって自分の力の封印は、願ってもないことだった。

「ええ、ただあなたの力は生命に、関わるものだから無くすことはできないし、大怪我を負ったりしてあなたの命が危なくなると、封印が解除されてしまうわ。あつ、でも再封印は簡単よ。」

「それでもいい。この力を封印してくれるなら。異世界だろうと行ってやるさ」

「それでは、乗り気になったところで、行き先の説明をするわね。これから行く世界では、全ての生き物にステータスカードっていう

物があつて、『カード・オープン』と唱えると、あなたの詳細が書かれたカードがその場に出てくるの、消すには『カード・クローズ』よ。これは、あなただけなんだけど『カード反転』で本来のあなたの力が表示されるから気をつけてね。私から言えるのはこれだけ。心の準備はいい？」

「俺に選択権はないんだろ」

「そう、ね。両腕を貸して封印を施すから。」

神様は一瞬悲しそうな顔を見せるが、すぐに両腕を所望する。

両腕を神様の手がある位置に持つていく。すると両腕を掴まれ次に瞬間、両腕に燃えるような熱が走る。

「うっ、があああ、あああ・・・があ・・・はあ・・・はあ」

熱が引いたとき、腕には禍々しい黒い刺青が刻まれていた。その刺青も時間が立つと消えた。

身体感覚がいつもと違う。どうやら力は、しっかり封印されているようだ。確認のために

「終わったのか？」

「終わったわ。再封印は両腕の刺青に触れて、心の中で『封印』って頭で念じればいいから、簡単でしょ」

「わかった」

「それじゃあ、そろそろ異世界に送るわね。あつ、会話と読解はサ―ビスしておくから。」

リクトの周りが白から黒に変わっていき、どんどん暗くなっていく。
次第にリクトの意識も薄れていき

「良き人生を優しい化け物さん。」

神がそう囁き、そこでリクトは意識を失った。

プロローグ 異世界と化物

次に目が覚めた時、リクトは森の中で倒れていた。

意識を取り戻したリクトは、神様の言葉を思い出していた。あいつは「良き人生を優しい化け物さん」と言っていた。

この世界は化け物でも、いい人生が歩める世界なのだろうか？
考えても答えがでるはずもなかった。リクトは一旦忘れることにして、辺りを見回す

「異世界か、草木は前の世界とあまり変わらないな。」

というか草木しかない。山か森の中のような。
そういえばステータスカードがあるとか言ってたな。試してみるか

「『カード・オープン』」

白い板状のカードが、宙に出てきた。

シン・タキカゼ

Lv 1

種族 人間 男

クラス なし

筋力

2

耐久

2

敏捷

2

知覚

3

魔力

1

職業 なし

技能 完全対話能力 完全解読能力

装備

布の服

革の靴

知らない文字で書かれていたが、書いている意味はわかった。完全解読能力のおかげだろう。それにしてもこのカード、まるでゲームの初期設定だな。

「『カード・クローズ』」

そうリクトが言うときカードは透けるように消えた。さてこれからどうするか、辺りに人の気配はないし自分から人に会いたいとは思わない。

それなら、まずは衣食住の確保からだな。

それには常識がいる、この世界の常識が。ファンタジーな世界と言っていたから、科学は期待できないだろうからインターネットのよくな便利なものはなさそうだ、となると情報源は人が本の可能性が高い。

憂鬱だ。リクトは自分の異常な力のせいで人に避けられていたため、会話を中心としたコミュニケーション能力にかなり問題があることを自覚している。人から情報を得ることができるだろうか？

「人を探さないといけないのか・・・はあ」

リクトはため息をつきながら歩き始める。

一時間経過

小さな池にたどり着いた。ここに来るまで人には会っていない。

「もしかして、この辺りに人はいないのか？」

池の畔で休憩していると、森から何かが飛び出してきた。

一角獣^{ユニコーン}に酷似した生き物だった。白い馬体に頭には渦巻き状の角がある。

よく見ると一角獣の後ろ足に、矢が突き刺さっている。

続いて森から武器を持った男達が出てきた。男達の内、何人かがボウガンを持っているから、一角獣に刺さっている矢はこいつらの仕業だろう。

「ようし追い詰めたぞ。ここなら遮蔽物はない。野郎ども仕留めろぞ」

ボウガンを構える男達。前の世界の感覚で、その前にリクトが立ち塞がる。

「止める！」

動物はリクトを恐れない。そのためリクトは、人よりも動物の方が好きだったりする。

「何でこんなところに、こんなガキがいるんだ？」

「おい、どうすんだ？」

「こつするしかないだろ。」

剣を持った男がリクトに近づき、胸を剣突きした。その躊躇のない動きに、リクトは避けるのを忘れてしまった。

ドサッ

リクトの身体が、剣が刺さったままその場に倒れる。

「おいおい、いいのかよ」

「いいんだよ。どうせ密猟の現場を見られた時点で、見逃がすわけにもいかなかったしな。」

「確かに。それにしても、何でこんなところにガキがいたんだ。」
「さあな、どうでもいいだろそんなこと。」

倒れたリクトは、男達の声が聞いていた。心臓を貫かれたのに生きているのだ。

こいつら密猟者か、それも人の命を奪うことに抵抗が無いようだ。さつき見た感じだと男は7人ぐらいだった。どうやってこいつらを追い払うか考えていると

両腕に、黒い刺青が浮かんできた。リクトの異常に気付いた、密猟者が指差す。

「おい、なんだあれ？」

密猟者に気付かれたので、リクトはその場に立ち上がる。その胸には、剣が刺さったままだ。

「ひい、な、なんだこいつ」

「生きてんのか？」

「嘘だろ、胸に剣が刺さってるんだぞ！」

リクトは、右手で胸から剣を引き抜き、男達にゆっくり歩いて近づいていく。リクトは驚いて逃げてくれるのを期待したのだが。

「うつ、・・・うああああ」

恐慌状態に陥った一人の男が、リクトに斬りかかってきた。他の男達も釣られてリクトに群がってくる。リクトは、大振りの攻撃を難なく避け、胴に剣を叩き込んだ。男はそれだけであっさり死んだ。次の男も、同じように殺した。

それを見た男達は左右から攻撃を仕掛ける。リクトは、左右からくる剣を、右手に持つ剣と左手で受ける。

「なっ」

「何だ、そりゃあ」

素手で剣を掴むような形で受けた左手は、肉が裂け夥しい量の血が流れる。リクトは一切気にせず、右側の男の腹を蹴り飛ばした。空いた右手の剣で、もう片方の男を斬る。リクトは、自分の血で汚れる、持ち手のいなくなった剣を持ち直して、さっき蹴ったまま地面に転がる男に投げつける。剣は男の喉に突き刺さり男は息絶えた。残ったボウガンを持った男三人は、呆然と突っ立っていた。

リクトが、剣を三人の前に投げつけると

「ひっ、ひいい、た、助けてくれ。」

「ば、化け物。」

「あんな化けものの、相手なんかできるか」

三人の男はその場から逃げ出した。リクトは、その三人を追わなかった。

化け物か、結局俺はこの世界でも化け物なんだな。その証拠に、身体の治療は異常な速さだった。すでに胸の傷は癒え、左手も、もう血が止まっている。

リクトは、ほとんど癒えた左手を見ながら

「『カード・オープン』、『カード反転』」

白いカードが出てきて、反転の言葉で一度カードは真っ黒になり、白い文字が浮かんできた。

シン・タキカゼ（裏）

LV3

種族 人間 男

クラス 人喰らい《マンイーター》

筋力 32

耐久 33

敏捷 30

知覚 34

魔力 21

職業 なし

技能 高速再生 命の蓄積 痛覚鈍化 完全対話能力 完全解読能力

装備

布の服

革の靴

人喰らい《マンイーター》、人を喰らう化け物か。予想はしていた。

前の世界でも、リクトが初めて人を殺してから、急に身体能力が上がったのだ。だから、わかっていづつもりだった。だが、こうして事実を突き付けられるとさすがにキツイ。

どうやら俺は、人間を殺して強くなる人間。まるで人類の敵じゃないか。

それにレベルの割りには、能力値が異様に高い。そこからもリクトがこの世界で異端なのは明らかだ。

「『カード・クローズ』」

リクトは、カードを閉じると池に入って返り血を洗い流す。そのときに黒い刺青に気付き、腕を組むようにして、封印を心の中で念じる。すると黒い刺青は、すぐに綺麗に消えた。

再封印が終わると、一角獣^{ユニコーン}の存在を思い出した。一角獣は歩けないのか、池に座りこんでいた。

リクトは、近づいて行き。

「言葉はわかるか？」

「【不思議だ。いつもは、おぼろげにしかわからないのだが、君の言葉の意味ははっきりとわかる。君は何者だ？】」

会話が出来た。どうやら完全対話能力は、人間以外にも有効らしい。

「俺は滝風^{タキカゼ} 陸刀^{リクト}。さっきの奴らが言っていた通り、化け物だよ」

「【奴らの言葉はよく解らなかったが、私は君よりも密猟者の方が嫌いだな。私は一角獣^{ユニコーン}のスレイ。そういえば礼を忘れていた。助け

てくれて、ありがとう】」

一角獣で、合っていたようだな。

「【どうしのだ?】」

リクトの目から涙が流れていた。

「えっ」

リクト自身、自分が泣いていることに気付いていなかったようだ。

「いや、何でもない。」

久しぶりだった。誰かを助けて礼を言われたのは。

リクトは、涙を拭き取って

「それよりスレイ、矢を抜こうと思うんだが?」

「【頼むよ】」

「了解。ちょっと待ってる」

リクトは、死んだ密猟者の服を剥ぎ取り、それを池で綺麗に洗ってから、スレイの近くまで持って行く。

それから矢を引き抜き、傷口を服を切り裂いて作った包帯で巻いて応急措置をした。

「【何故、君が化け物と呼ばれるのだ? 私には解らないのだが】」

「人間は自分とは違うものを受け入れられない生き物だからな。それに俺の力は、確かに化け物さ」

「【力は使い方しだいだと思うがね。】」

「それが真実でも、俺は人には受け入れられないと思う。」

リクトは、前の世界で人を助けた時に、怖がられた経験がある。だからスレイの言葉を、素直に受け入れることができなかった。

「【そうか】」

悲しそうに目を伏せるスレイ。

「【……リクトよ、私は君に恩ができた。何か礼をさせてくれ。】」

「なら、この世界の常識を覚えてくれないか？」

「【常識？構わないが、私は一角獣^{ユニコーン}だ。あまり人の常識には、詳しくはないぞ。それより人里に、行かなくていいのか？】」

「人には……会いたくないんだ。」

「【……わかった。だが、それだけでは、命を救ってくれた礼には不足だろう。リクト、私の主になってくれないか、私は君が気に入った。】」

「一角獣は、女性を好むんじゃないのか？」

「【それは、知っているのか。まあ、気にするな。私は変わり者なのだ。それでどうだね?】」

「ありがたいよ。スレイの主、やらせてもらうよ。」

「【そうか、これからよろしく頼む。我が主よ】」

「よろしく。そこで相談なんだが、田舎暮らしでもいいか?」

「【何処でも構わない。主の好きなように】」

「田舎でのんびりするだけだぞ」

「【主は、人に会いたくないのだろう。田舎でのんびり、多いに結構。いっそ山奥で暮らすのもいいだろう。】」

スレイは、リクトのことを優先してくれるようだ。

「ありがとう」

この後、スレイが動けるようになると、リクトとスレイは山奥に姿を消した。

1話 迷子の獣人

リクトがこの異世界に流されてから、三年の時間が流れた頃。
二人の冒険者が、山の中を彷徨い歩いていた。

「お腹空いた」

「そうね」

「どこどこだろう?」

「さあ」

「………はあ」

「ミーシャ、元気出して」

「なんでクーラは落ち着いていられるのよ。もう私達、丸一日なにも食べてないのよ。」

「それでも焦ってるわ」

そう返事をした本人の顔は、少しだけ眉が下がっている気がする。

「迷ってからもう3日、食料も無し、さすがに焦るわよ。」

「確かにそうよね」

只今、絶賛迷子中かつ空腹の二人は獣人の女冒険者だ。

落ち着いている方が、銀色の犬耳にロングの銀髪、青い眼をした獣人で、まだあどけなさを残す少女だ。名前はクーラ。気落ちしている方は、黒い猫耳にショート黒髪、黒い眼をした獣人で、活発そうな少女だ。まあ、今は空腹で元気がないが。名前はミーシャ。

「魔物もないし、どうなってんのよ」

「誰かが全部駆逐したのかも」

「それにしたって、動物すらないのはなんでなのよ。」

この山に入ってから、ほとんど動物を見ていない。いないわけではないのだが、自分達の前に姿を見せないのだ。

「ミーシャ」

その時、クーラがミーシャを呼んで、何かを指差した。

「何？」

「あれ」

クーラが指差した先には、小熊2頭が戯れていた。小熊を見たミーシャの目付きが変わる。

「クーラ、火の準備お願い。」

「任せて」

普段なら小熊の可愛らしさに躊躇するところだが、この森に入ってから初めて見つけた食料で、さらに二人の空腹は限界にきていた。小熊を見つけた瞬間、二人は狩ることに決めた。

ミーシャが、腰の剣を抜いて走り出す。猫の獣人特有の瞬発力を活かして間合いをつめる。

小熊の側まで来たミーシャが剣を降り下ろす。

今にも、小熊の命を奪おうとしていた剣を、別の剣が受け止めた。

「なっ！？誰！」

剣を受け止めたのは、黒衣を纏い両腕を黒い包帯でグルグルに巻きにした男だった。

剣と剣がぶつかる音に驚いた小熊は、逃げていつてしまった。

「あ~~~~、あんた何すんのよ！」

ミーシャが男を睨み付ける。

「あれは子供だ。」

「うっ」

正論だ。

「し、しかたないじゃない。こっちは丸一日なにも食べてないのよ」

「腹が減ってるのか？・・・森を出ればいいだろ。」

「え、えっと、その、迷ったのよ」

後半になるにつれ、ミーシャの声が小さくなる。

「・・・・・・・・」

「ちょっと、何か言いなさいよ。」

「・・・・・・・・あ、わかった。付いて来い。」

「ため息を吐くな！。それに、何わけわかんないこと言ってるの。誰があんたみたいな怪しいやつに」

「ミーシャ」

「何よクーラ！」

「落ち着いて。このままだと、私達迷子のままよ」

「うっ」

確かにそうだ。

「それに」

「それに？」

「早く追わないと見失う。」

男はクーラとミーシャを置いて、奥に進んでいた。

「ちょっとー！」

慌てて男を、追いかける二人。

「ちょっと、待ちなさいよ。」

男が、立ち止まって振り返った。

「なんだ？」

「へっ？えっと」

「あなた、名前は？」

止めていながら、返事があると思っていたミィシャは、戸惑ってしまつた。そこにクーラが男の名前を尋ねた。

「俺はリクト・タキカゼ、隠棲中の冒険者だ。」

「「隠棲中の冒険者？」」

訳が分からないといった感じの二人をおいて、リクトはまた歩き出した。

「ねえ、私達も名乗った方がいいのかな？」

「あの人は別にどうでもいいみたいよ」

「そうよね。私達を置いて、どんどん先に行っちゃうし」

「今は、大人しくついて行きましょう。その内、話すこともあるでしょう」

「そうね」

二人は大人しくリクトについて行くことに決めた。

全く会話のないまま、三人は山の中を進み開けた場所に出た。そこにはログハウスが建っていた。

「家がある。」

「あ、あんた、こんなところに住んでるの？」

「そうだが」

リクトはそれだけを答え、ログハウスに進んでいく。リクトがログハウスに近づくと、周りの森から動物達が姿を現した。ウサギ、リス、小鳥などの小動物から、牛、羊などの牧畜までがリクトの近くに集まってきた。中には鷲や熊などの猛獣もいる。動物達はリクトに、身体を擦り付けたり、顔を舐めたりと、じゃれ付いてきていた。リクトが動物達と戯れる光景は、浮世離れしていて、とても暖かい。まるで、その場だけ時間が緩やかに流れているようだった。クーラとミーシャは、啞然としながら、その光景に引き込まれていく。

「何をしてる？早く来い」

リクトの声に、二人は夢心地から引き戻される。
ログハウスに進む時、動物達にじろじろ見られて落ち着かない様子のだった。

ログハウスの近くに着くと、ログハウスの陰から、一角獣^{ユニコーン}が現れた。

「一角獣!？」

「【主、このお嬢さんたちは?】」

「喋った!？」

「迷子だ」

「ぶっちゃけるな!他に言い方があるでしょ!」

ぐう~~~~~x2

頬を染める獣っ娘の二人。

「腹が空いているらしい」

「そこはいいから!」

「【主、からかうのはそれくらいに。】」

「そうだな。二人ともどうぞ」

「ぜえぜえ」

リクトは、二人を中に招き入れた。ミーシャは、叫びすぎて息切れしている。

「モーリー、ミルクを二人に出してやってくれ。俺は何か適当に作るから。二人はそこに座って、待っていてくれ。」

リクトがモーリーとやらの指示を出す、それが二人を驚かせた。モーリーとは、おサルさんだったのだ。エプロンを着たサルが、二人の前にミルクの入った木製のコップを持ってきて、二人の前のテーブルに置く。さらに、椅子まで持ってきてくれた。

「どうも」

クーラは、テーブル近くの椅子に座った。

「クーラ、ここは流すところなの！」

「ミーシャ・・・私、そろそろ驚くのやめようかと」

どこか達観した様子のクーラだった。

「そ、そうね。そうしましょう」

ミーシャも椅子に座る。そこに

「【お嬢さん？】」

スレイが、窓から顔を入れてきた。

「うひゃ」

さっそく驚いているミーシャ。

「【おお、すまない。さっきのことで訂正を、私は喋っているわけではなく、首につけた魔法具が翻訳しているだけなのだ。それに元々ここが、主が家にいる時の私の定位置なのでね。】」

一角獣の首に首輪状の魔法具が付いていた。呪文が書かれた装飾のない簡素な作りだ。

「どうして喋るの？」

「【主は人との対話が苦手だね、私が喋れた方が都合がいいのだ。】」

「ほうほう」

「なんでクーラはそんなに順応してるのよ〜」

二人と一頭が、雑談？していると

「できたぞ。」

そう言っで、テーブルにパンとジャム数種、ハムエッグ、腸詰め、チーズ、サラダ、コンスープ、果物数種が並んでいく。

テーブルに並ぶ食べ物に、クーラとミーシャが目を輝かせる。

「「食べてもいいの（ですか）？」」

二人が同時に、リクトに問いかける。

「どうぞ」

「いただきます」

すごい勢いで、二人は食べ始めた。

「おいしい、このパン焼きたてだわ」

「モーリーが、焼いたパンだよ」

「サ、サルが、パンを焼くの？」

「ああ、俺が教えた。」

教えたということは、リクト自身も作れるということだ。

「【今並んでいる食事のほとんどは、主が作ったものだよ。ジャムもチーズも腸詰めもね】」

「ほんと？」

今度は、クーラが驚く、チーズや腸詰めの完成度に驚いたのだ。

「冒険者なんだよね？」

「隠棲中のな」

隠棲した者を冒険者と呼んでいいのか、クーラにはいまいちわから

なかつた。

物思いに耽っていると、テーブルの上の食べ物にミィシャにどんどん食べられていくことに気付く。クーラは考え事をやめ、食事に集中することにした。

2話 食後の自己紹介

しばらくして食事は終わった。

「「ごちそうさま（でした）。」「」

「おそまつさま」

モーリーが食器を片付け、リクトが紅茶を入れる。焼き菓子もセツトだ。

「わあ〜」

ミーシャが嬉しそうな声をだして、お菓子に手を伸ばす。リクトは出会った頃が嘘のように親切だ。どちらが本当のリクトなのだろう？ クーラは、この不思議な男のことを知りたい気持ちだが、どんどん強くなっていく自分に気づいた。

「あの、リクトさん、どうして、ここまで？」

「俺が招待したんだ。持て成すのは最低限の礼儀だろう。不服か？」

「い、いえ、そんな」

「【主、そう意地悪しないでよ】」

「あの、本当にありがとうございます。とても美味しかったです。あの、よろしければ、ステータスカード見せ合いませんか？」

「・・・まあ、いいよ」

「それでは、ほらミーシャも出す。『カード・オープン』」

「ほーい『カード・オープン』」

「『カード・オープン』」

「どうぞ」

クーラが、ミーシャのカードも取って二つとも渡してきた。

クーラ・ポートレアモン

Lv 8

種族 獣人 女

クラス 魔法師

筋力 13

耐久 8

敏捷 13

知覚 20

魔力 29

職業 冒険者

技能 初級風系魔術 中級氷系魔術

装備

銀杖

白いマント

布の服

皮の靴

ミーシャ・ミレンツ

Lv 8

種族 獣人 女

クラス 獣戦士

筋力 19

耐久 11

敏捷 29

知覚 18

魔力 6

職業 冒険者

技能 半獣化 初級剣術

装備

鋼の剣

皮の鎧

布の服

皮の靴

おかしい、この世界のステータスは、レベル×10＝能力値の合計のはずだ。彼女達のレベルは8なので、合計は80のはず、なのにステータスの合計は83になっている。クラスや装備が関係しているのだろうか？

シン・タキカゼ

Lv 12

種族 人間 男

クラス なし

筋力 25

耐久 24

敏捷 25

知覚 3 4

魔力 1 2

職業 冒険者

技能 初級拳闘 初級剣術 初級炎系魔術 完全対話能力 完全解

読能力

装備

ダマスカスの剣

黒衣

皮の靴

黒い包帯

「クラス無し？」

「ああ、良くわからないんだ」

「えっ？」

クーラが驚きの声を出す。そしてリクトを伺うようにしながら

「その、神殿で簡単に追加、変更ができますよ。それにクラスを設定すると、ステータスや魔法の威力にボーナスが付きますから、設定しなのはもったいないですよ。」

「そうか」

リクトの反応が薄い。なにか悪いことを言ったのだろうか、とクーラがおろおろしていると。

「【すまないな。主に悪気はないのだ。ちょっと人間不信だね。打ち解けるのに時間がかかるのだ。】」

「おい、スレイ」

「【そうだろう。アメリカ殿の頼みだって、最後には聞いたではないか。】」

「うぐ」

苦い顔をするリクト。

「ねえねえ、完全対話能力ってなに？」

「誰とでも話せるんだよ。口から言葉を喋れるなら、誰とでも人でも動物でもね」

「すごい、それで動物達とあんなに仲がいいんだ。もしかして私達に動物達が近づかなかったのも」

「俺が、俺以外の人間に近づかないように教えている。それよりあんた達」

「むつ、名前で呼んでよ。カードに書いてたでしょ、あたしは、黒猫獣人のミーシャ、よろしくね。」

「私は、銀狼獣人のクーラです。その、名前で呼んでもらえませんか？」

上目遣いのクーラが、とても可愛かった。

「わかった。名前で呼ぶよ。それで、ミーシャとクーラは、これか

らどつするんだ?。」

「【主、そこは送ってやるくらいの事が、言えないのかね】」

「無茶言つな。このあと、用事があるのは知ってるだろ。」

「そうなのですか?。」

「ああ、まあな。予定が合わなくても、動物達に麓まで送らせるから、帰りのことは気にしないでいいぞ。それでこの後の予定は?。」

「【主は、それでも君達のことを気にしているのだ。】」

スレイが茶々を入れる

「スレイ、お前は少し黙れ」

「え、えーと私達は、王都を目指しています。」

「王都を目指していて、何でこんなところで迷うんだよ。」

「ミーシャが、近道をしようと」

「ちょ、ちよつとクーラ! あんた、今日は良く喋るわね。」

「そ、そんなことはないわよ」

二人とも、何故か顔を赤くしている。何が恥ずかしいのだろう?

スレイは、（主は、自分の前だから、とか考えないのだろうな）と

思っているが、口にはせず、ほかの事を口にする。

「【ちょうどいい。王都になら、我々も行く予定だ。転移門ゲートを使うから時間も短縮できるぞ。】

「門が使えるのですか!？」

転移門とは、大きな町に設置されている、門と門の間を瞬間移動できる門のことだ。門は、悪用されないように厳重に管理されていて、通行証が必要になる。一日限りの通行証を手に入れるのにも、厳正な審査が行われるため、一般人はあまり利用できない。門を日常的に使えるのは、国の要人だけ、というのが現状だ。クーラが驚くのも仕方がない。

「クーラだって、結局驚いてるじゃない。」

すごさのわからないミーシャは、あまり驚いていないようだ。

「それより、同行させてもらいましょうよ。転移門がつかえたら、王都なんてすぐじゃん。」

「転移門まで三日かかるがな。それまで一緒に行動するつもりか？」

「私は構いません。リクトさん、良い人みたいだし」

クーラが、リクトを見て微笑む。それを見たミーシャが、

「おお、クーラが笑ってる珍しい。まあ私も、変わってるけど、リクトが良い人つてのに、異議はないわね。」

「…………勝手にしてくれ」

「【照れておるのだ】」

「スレイ、窓をしめるぞ」

「【主、このお嬢さん達は、主のことを純粋な目で見てくれている。よき友人になれるやも知れん。そこで、主を売り込もうかと】」

「あれのどこが売り込んでいるんだ？」

「【主は、誤解されやすい言動を取る癖が、おありですからな。】」

「…………勝手にしろ。俺は、動物達に挨拶してくる。戻ってくるまでに準備をしておけよ。」

リクトは、家を出て行った。

「【逃げられましたか。まあいいです。それでは、許しも貰ったところで、主のことを簡単に説明しようと思うのですが、…………聞きたいですか？】」

「「聞きたい（です）」」

クーラとミーシャは、獸耳を立てて興味津々のご様子だ。

「【まず、先程の食事、主が作ったと言いましたが、実は、この家も、椅子、テーブル、食器、ベットまで主の手作りなのです。】」

「「本当？」^{ですか}」

「【主は、幅広い知識をお持ちで、さらに手先も器用でしてな。あらゆる物を自作してしまうのです。どうです、すごいでしょ。料理も得意ですし、優良物件ですよ。】」

「確かにすごい。」

「なんだから、ここに来てから驚いてばかりだよ。」

「【そして、ここだけの話、主は心に深い傷を負っていてな。詳細は話せませんが、そのせいで、人間不信なのだ。だからというわけではないが、主と仲良くしてくれまいか？そして本当の主を知っても嫌にならないでいてくれると、わたしは嬉しいのだが、そこまでは望まない】」

スレイが真面目な雰囲気ですう話した。それに、ふたりも真剣に答える。

「仲良くするのは、問題ありませんよ。リクトさんには恩がありますし、個人的に興味もありますから」

「あたしもいいよー。最初は何だこいつって思ったけど、ご飯は美味いしかったし、それに、動物達という時のリクトの顔、とつても優しい顔してた。あの顔を近くで見てみたいし」

「最後だけ聞くと、まるで告白ですね。」

「ち、違っわよー！」

ミーシャが立ち上がって否定してくる。かなりの慌てようだ。逆に

怪しい。

「わかってる。それに、私もあの表情を、私に向けて貰いたいとは思ったしね。」

「【おお、では、二人とも主の恋人候補ということですね。】」

「な、なな、何でそうなるんですか!」

今度はクーラが立ち上がって、スレイに問いたです。

「【主のあの顔を見たいのなら、恋人ぐらいにならないと厳しいですぞ】」

「うつ、マジ?」

「・・・考えておきます。」

「ちょっとクーラ!」

「【それでよい。考えるのは、自由じゃ。ただ】」

「ただ?」

「【生半可な覚悟で、主にちょっかいを出すのは、私が許さないの
でそのつもりで】」

ゴクッ

それまで人のよさそうな雰囲気だったスレイが、本来の聖獣の空気

を纏って二人を威嚇した。

「わかったわ、それも肝に銘じておきます。」

「りよ、了解」

元のやわらかい雰囲気に戻ったスレイが

「【すまん、主は、繊細な心の持ち主だな。それに私の恩人でもある。あまり主の泣き顔を、見たくないのだ。】」

その言い方だと、泣き顔を見たことがあるということだ。

「【この話はこれまで、何か聞きたいことはないかね。】」

「リクトさんのことは自分で聴いて見ます。なのでリクトさんとスレイさんの馴れ初めを聞かせてくれませんか？」

「【構わんが、色々話せない部分があるから、結構省くぞ】」

「構いませんお願いします。」

二人に、リクトとの出会いをスレイが話し終えた頃に、リクトが戻ってきた。

3話 クラスの追加

リクトがログハウスに戻って来ると、すぐに出発することになった。リクトがスレイの身体に、荷物を括り付けていると、モーリーが外に出てきてお辞儀をする。

「ウキキ（【行ってらっしゃいませ】）」

「ああ、家のこと、頼んだぞ。」

リクトとサル会話は、横から見ていると、とてもシユールだ。普通の人たちには、サルの鳴き声にリクトが真面目に返しているようにしか見えない。

「ウキ（【任せてください】）」

「行ってくる」

三人と一頭は、ログハウスを出発した。

山からは、30分ほどで出られた。

「こんなに、簡単に出られたの」

「私達は、何をしていたのでしょう」

獣人娘の二人は山の出口で、項垂れている。

「……………それについては悪かった。」

リクトが、気まずそうに言うと、二人が顔を上げて

「「はい？」」

「……何も知らない人間は、山の奥に行けないようにしているんだ。君達が、一日迷ったのに関係しているかもしれない」

「えっ、……あんたのせいだったの！」

「別に外に、向かう分には問題ないはずなんだが。」

「むっ」

ミーシャがむくれる。実際に30分ほどで外に出られたのだ、リクトの言葉は本当なのだろう。

「ど、どうやっているんですか？」

「木や獣道を使って、人を誘導したり、登っている気がするように錯覚させたり、と色々な。」

「リクトさんって、できないことってあるんですか？」

「そりゃあ、いろいろできないことはあるさ。設備が必要なものは無理だし。」

「設備って時点で、次元が違いますよ。」

この頃になるとクーラの視線には、少し呆れが混じっていた。

「それより、この後はどうするのよ？」

「近くの町に泊まって、明日から本格的に移動だな。」

「それなら、町に着いたら、神殿に行きましょう。そして一緒に、クラスを決めましょう。」

クーラが、リクトの手を握って念押ししてくる。

「あ、ああ」

「あっ」

リクトに接近しすぎていることに気付いて慌てて手と放す。

「今日のクーラは、積極的ねえ・・・ムフフ」

「なっ」

ミーシャが口を猫みたいにして、クーラをからかう。顔を真っ赤にして、恥ずかしがるクーラは、とても可愛らしかった。

「ねえねえ、リクトって、いつもは何やってるの？」

「いや、これといって、なにも」

「【主は、いつも動物と戯れるか、新しい料理に挑戦している。いつか振るってくれるかも知れんぞ】」

言葉を濁すリクトの代わって、スレイが質問に答えた。

「それは、本当に楽しみですね」

「えっ、さっきのご飯は？」

「【あれは、手抜きをしたわけではないが、あくまで有り合わせだよ】」

「ほうほう、・・・リクト楽しみにしてるよ。」

「まあ、それまで俺と仲良くできていたらな」

「「?」?」

リクトの意味深な言い方に、首を傾げるミーシャとクーラ。

「いや、なんでもない」

その場を誤魔化したリクトを、スレイが何か言いたそうに見るが、結局最後まで黙っていた。

「さあ、早めに町に着きたい。早く行こう」

リクトが地図を出しながらそう口にして、三人と一頭は歩き出した。近くの町には、日が出ている内に、着いた。

「さあ、リクトさん神殿に行きましょう。」

クーラに、右腕をとられ

「いや、先に、宿屋に」

「いいから、いいから」

ミーシャに、左腕をとられた。

二人の女性に腕を掴まれて、連行されていく。二人とも美少女と呼ばれるにふさわしい女の子だから、両手に花状態のリクトに向けられる視線には、嫉妬が多分に含まれており、とても視線が痛い。

それに女性と腕を組んだのは初めてで、リクトは少なからず動揺していた。

「着きましたよ。リクトさん。どうしました？」

顔が少し赤いリクトを不思議そうに見るクーラ。

「いやなんでもない。それより腕を離さないか？」

「あつ、そ、そうですね」

クーラは、言われて初めて、腕を組んでいることを意識したらしい、慌てて腕を解放する。クーラが放すと、ミーシャも腕を放した。

「今日は、どういったご用件でしょう？」

そうこうしていると、神官の女性が近づいてきた。

「クラスの、追加をしたいんですが。」

「初めてですか？」

「はい。そうです」

「わかりました。どうぞこちらへ」

三人は、奥の部屋に通された。その部屋の床には魔方陣が描かれていて、リクトはその中心に立たされた。

「では、『天の神々よ、この者に適正あるクラスを、ご揭示ください。』」

神官が祈りを捧げると、神官の前にステータスカードに似た白い板が現われた。白い板には、いくつかの文字が書かれているようだ。

「これが、クラスカードです。こちらを見てください。」

神官が、出てきたクラスカードをリクトに見るように進める。クラとミーシャも、カードに書かれている文字を見に来る。

クラスカードには

選択可能数 2

選択可能クラス

剣士 拳士 戦士 従士 獣使い 魔法使い

「いろいろ、ありますね」

「すごい」

何を選べばいいのが全くわからないので、聞いてみるか

「何を選択したらいいと思う?」

「そうですね。今は動物を連れていませんし、剣士と拳士でどうですか?」

「じゃあそうするか。この選択可能数っていうのは?」

「レベルが10増えることに、選択できるクラスが増えるんです。ついでに言うと、職業の方はいくつでも追加できますが、多くても三職くらいですね。」

「ありがとう、クーラ」

「どういたしまして」

「それじゃあ、剣士と拳士をお願いします。」

神官の女性に選択するクラスを伝える。

「わかりました。ステータスカードを、よろしいですか」

「『カード・オープン』」

シン・タキカゼ

Lv12

種族 人間 男

クラス なし

筋力 25

耐久 2 4
敏捷 2 5
知覚 3 4
魔力 1 2

職業 冒険者

技能 初級拳闘 初級剣術 初級炎系魔術 完全対話能力 完全解

読能力

装備

ダマスカスの剣

黒衣

皮の靴

カードを神官に渡す。

「それでは、追加しますね」

ステータスカードの上にクラスカードをかざして、神官が何かを祈る。するとステータスカードは、次のように変わった。

クラス 剣士 拳士

筋力 2 5 < 2 7
耐久 2 4 < 2 6
敏捷 2 5 < 2 6
知覚 3 4 < 3 5
魔力 1 2 < 1 2

大した苦労もなくステータス値が上がってしまった。便利な世界だな。

「同じクラスをずっと使っていると上位のクラスが追加されたり、

何か条件を満たすと、クラスが増えたりします。獣使いなんかが良い例ですね。獣使いは、動物と仲が良い人だけになれるクラスですから。」

「へえ」

クーラは、選択可能数といい、どうやら説明好きらしい、色々この世界のことを教えてくれるのは、異世界から来たリクトにとってはありがたい。

「次は、宿屋に行きましょう。」

どうやら、あまり常識を知らないリクトに、色々と教えることができて、嬉しいらしい。町に来てからのクーラは活き活きしている。しかし、宿屋で問題が起きた。

「部屋がない!?!」

「はい、申し訳ありません。今日はもう、三人部屋がひとつだけ空いているだけでして。」

三人部屋に恋人でもない男女が一緒の部屋に止まるのは問題がある。しかし、この町は、あまり大きくないので、宿屋はここしかない。だから、リクトは早めに来たかったのだが。神殿に行きたがっていた二人を強く止めることができなかった。

「ごめんなさい、リクトさん」

「ごめん」

神殿に行くことを押し通したからだろう、クーラとミーシャが落ち

込んでいる。

「いや、知ってて強く反対しなかった俺も悪いんだし。今日は俺が野宿するよ。」

「ダメです！恩人のリクトさんを野宿なんてさせられません。それにやっぱり原因は私達にあるんですし、ここは私達が。」

「それはダメ。それじゃあ、俺がゆつくり休めない。」

女を野宿させて、ぬくぬくとベット寝られるような神経は持ち合わせていない。

「それじゃあ、えっと、えっと」

「クーラ、ちょっと」

ミーシャが、クーラに何か耳打ちをする

「じょじょじょじょ」

「いいのね」

「うん」

「リクトさん」

目が本気だ。ただ、ミーシャが横でニマニマしているから、碌なことにならない気がする。

「な、なんだ？」

「私達とお泊りしませんか？」

クーラが、大きな声できわどい事を言った。あらかじめ言うておくが、ここ場には他の客も結構いる。特に男達が聞き耳を立てている。是でも否でも、騒ぎになりそうだ。リクトが答えられないでいると

「私達なんかと、一緒は嫌ですか？それなら私達は野宿します。」

いつの間にか、否と言え、女の子を外に追い出すことになってしまった。今度は、周りから女の視線も加わって逃げ場がなくなる。

「わかった。一緒の部屋で頼む」

「はい」

周りの男供が、騒ぎ出すが無視する。

今日一番の笑顔のクーラの横で、ミーシャが腹を抱えて笑っていた。クーラは、何故ミーシャが笑っているのか、わからないようで、首をかしげている。クーラには、少し天然が入ってるかもしれないな

部屋に入ると、そのミーシャの笑顔が固まった。部屋には、キングサイズのベットが一つだけだったのだ。

そりゃあ、空いているはずだ。だれも使いたがらないだろう。三人のサイズのベットを使うことが普通は無い。宿屋の方はどういうつもりで、この部屋を作ったのだろう？

「リクトさん、私達汗を流してきますね。」

クーラは、この状況に全く動じていなかった。固まっただまのミーシャを連れて浴場の方に向かっていった。

リクトも、風呂に行くことにする。もちろん男のリクトの方が入浴の時間は短いので。すぐに上がって、部屋に戻ってきた。

「楽しかったな。」

クーラとミーシャは、まだ入浴中だし、スレイは、外の厩舎にいるため、ただの独り言だ。

人と、一緒の時間を、過ごすのは久しぶりだった。

二人との会話も、神殿に引きずられて行ったのも楽しかった。スレイの言った通り二人ともいい子達だった。

だからこそ、人喰らい《マンイーター》のことを知られるのが怖い。だが、知ってほしいとも思う。もしかしたら知っても、拒絶されないかも知れないと、この世界に来てから思えるようになった。

今は、まだ無理だが

「いつかは」

「何がですか？」

クーラとミーシャが戻ってきた。風呂上りで、クーラの銀髪はキラキラ輝いていて美しい。ミーシャの黒髪は、しっとりしていて色っぽい。

「明日のこともありますし、もう休みましょうか。」

「そうだな」

「ちょっと待って、寝る配置は、どうするの?」

「それはもちろん。」

クーラが自信満々に、提示したのが

クーラ・リクト・ミーシャ

の順番だった。クーラのこと、よくわからなくなってきた。

「どうして、リクトが真ん中なの?」

「不公平を無くすためよ。他にいい配置がある?」

「リクトは、いいの!?!」

「別に構わない」

「そ、そっか。じゃあしょうがない、寝ましゅ、寝ましゅか。」

キョドリまくりのミーシャ。

(二人が寝たら、抜けだそう)

三人川の手でベットに入る。

「おやすみなさいリクトさん。」

「おやすみリクト。へ、変なことしたらダメだからね。」

クーラは、腕を組むことすら恥ずかしがっていたのに、同衾は平気らしいやはりどこかずれている。ミーシャのほうで、正常な反応だろう。

「ああ、おやすみ」

～一時間後～

リクトは、ベットを抜け出せないでいた。クーラに、腕を抱えられ、足を絡められている。ミーシャは、リクトに背を向けて寝ているが、尻尾をリクトの腕に絡めてきている。ふさふさしてやわらかい尻尾だった。

リクトは、二人に絡まれて抜け出せなくなっていた。それもクーラが頬擦りしてきたり、匂いを嗅いでくるので、くすぐりたいし、腕に当たっている胸が気なったりで、この日リクトはあまり眠ることができなかった。

4話 転移門と女騎士

次の日、三人と一頭は、転移門のある町を目指していた。

「そつえば、クーラとミーシャは、カネは持っているのか？」

ふと気になって二人に尋ねてみた。昨日の宿賃は、リクトが払った。

ちなみに、この世界の通貨は

金貨一枚＝10000コニ

半金貨一枚＝1000コニ

銀貨一枚＝100コニ

半銀貨一枚＝10コニ

銅貨一枚＝1コニ

1コニ＝10円くらいだ

二人は、持ち金を確認すると、

「銀貨3枚」

「銀貨2枚と半銀貨4枚」

二人合わせて5400円くらいだ。それでどうやって王都に行くつもりだったのだろうか？ 転移門を使わないと10日はかかる。どこかで依頼でも受けるつもりだったのだろうか、それにしただけで無計画すぎる。

「お前達、本当に冒険者か？」

「あはははは」

「すみません。私達、駆け出しなもので」

駆け出しとか、そういう問題じゃあないんだが。気まずそうに笑うミーシャと、そつばを向いて言い訳をするクーラを、呆れ顔で見るリクト。

「まあいい。王都までは俺が立て替えておくから。」

「そういうリクトは、いくら持つてるのよ」

ミーシャが興味本位で聞いてきたので、二人に硬貨を入れている袋を見せる。

「「わああ」」

「半金貨8枚と銀貨30枚くらいだな」

11万円くらいだな。ログハウスには、まだまだある。

「どうしてこんなにもってるの？」

「偶にギルドの依頼をやっていたのと、色々作った物を売っていたからな。それにあそこに住んでいると、ほとんど金を使わない。」

本当はそれだけじゃなくて、一度だけ大きな仕事をしたことがあるのだ、それも理由の一つだ。

「ああ、そつか。自給自足だもんね。いいなあ。依頼受けないとなあ」

「その、なんだ、今度一緒に、依頼でも受けるか？」

「えっ、……うん、やる！。リクト、約束だよ」

最初は驚いていたが、言葉の意味を理解したミーシャは、嬉しそうにして、約束を念押ししてくる。

「ああ約束だ」

「私とも約束してくれますか？」

少し不安そうなクーラが聞いてくる。

「もちろん」

「ありがとうございます。」

クーラが、嬉しそうに笑う。スレイもどこか満足気になっている。リクトの方から誘ったことが嬉しいのだろう。スレイは、お節介なところがあるから。

「そつえば王都には、何の用があるんだ？」

「いえ、用があるわけではなくて王都を拠点に、活動しようと思ひまして。」

「地元でもう少しゆっくりしても、よかったんじゃないか？」

「その、地元には、居られなくて」

言葉を濁すクーラの様子からして、なにか訳アリなのだろう。
追求はしない方がいいよな。話したくなったら、向こうから話してくるだろうし。

「そうか」

「【主、町が見えてきたぞ。次の停泊は、あそこでいいのか】」

「ああ、あそこに停泊する。」

今度は、絶対二部屋とろう。

それから2日後、転移門のある町に到着した。早速転移門を使うために、転移門が設置されている場所に行ったのだが。ちなみに転移門は、同時に三人ぐらいが通れそうな大きさの白い扉に、複雑な魔方陣が掘り込まれた物だった。

「ダメだ、ダメだ、一般人に転移門は解放されていない。」

リクト達は、転移門を警備する騎士に、道を塞がれていた。リクトは通行証を見せるが

「通行証があるだろう。」

「そんなもの、偽物に決まっている。お前達のような、ただの冒険者が、本物の通行証を持っているわけがないだろう。」

騎士は通行証の確認すらしない

「本物よ！ねえリクト？」

「たぶんな」

「リクト……」

いい加減なリクトの返答に、困り果てるミーシャ。アメリカにもらった物だから、たぶん本物だ

「だいたい、本物ならその通行証、どうやって手に入れた。」

「人に貰った」

「も、貰える訳がないだろう！」

騎士が怒鳴るが、本当なのだから仕方がない。しかし、説明するのは面倒だし

「二人とも悪いけど、ちょっとどこかで時間を潰そう。その内、迎えが来るだろうから。」

「ええ、構いませんが、誰が来るんですか？」

「アメリカって騎士が来るはずだ。」

「ああ、スレイさんが言っていた。」

「暇つぶしに、どこかで食事でもしよう。」

「ちょっと待て。お前、今アメリカと言ったか」

その場を後にしようとしたリクトたちを、先程の騎士が呼び止めた。どこことなく怒っている気がする。

「ああ、そうだが。知っているのか？」

「最近復帰された、キール王女様の近衛騎士だ。あの人と貴様のような者が知り合い？冗談も大概にしろ」

やはり怒っているようだ。もしかして、アメリカのことが好きなのだろうか？そうだとしても、そんなことで、俺に怒りをぶつけられても迷惑だ。思わず少し挑発気味に返事を返してしまう。

「あっそう。ご苦労様、そのアメリカに職務怠慢で怒られないといいな」

職務怠慢とはもちろんリクトの通行証を確認しなかったことだ。

「まだ言うか！」

突然騎士が、リクトに掴みかかってきた。思わずリクトは、その腕を掴んで後ろに投げてしまい、騎士を背中から地面に叩きつけてしまった。

元から美少女二人をつれているリクトに、あまりいい印象が無かった周りの騎士たちが、仲間を投げられたのを見て、騒ぎ出した。

「貴様何のつもりだ！」

「牢屋にぶち込んでやる」

「先に手を出したのは、その人です。言いがかりはやめてください。」

「な、なんだと！」

クーラが、それに反論して、騒ぎが大きくなりそうになった時

「お前達、持ち場を離れて何をしている？」

そこに、よく響く声の持ち主が現われた。茶髪をポニーテールにした、キリツとした印象の女騎士が転移門の前に立っていた。リクトが騎士を投げた原因になった、アメリカ本人だった。

「ア、アメリカ様、その、この者たちが、仲間を投げ飛ばしたので」

「投げ飛ばした？・・・うん？リクト殿ではないか！」

アメリカは、言い訳をする騎士たちの中からリクトを見つけると、顔を輝かせる。

「おう、早かったな」

片手を上げて返事をするリクトに、周りの騎士が驚く。

「お前達その人は、私の知り合いだ。解放しろ。」

「・・・も、申し訳ありませんでしたー」

騎士たちが謝罪しながら数歩下がり、アメリカに道を作った。

「リクト殿、久しぶりだな。」

アメリカが、リクトの傍まで走り寄って来て、両手でリクトの手を握って上下に振り回す。

「ア、アメリカ、ここだと何だから、まずは、転移門をくぐろう。」

リクトが、アメリカの肩を後ろから押して、転移門に向かう。騎士たちとクーラ、ミーシャの視線が痛いかったのだ。

「おお、そうだな。あつ、お前達、今後はこういうことはないようにな。」

騎士たちに釘をさしながら、アメリカとリクトは転移門に消えた。二人と一頭も、慌ててついていく。

「ところでな、リクト殿。こちらの、二人とはどういう関係なのだろうか？」

王都にある転移門の近くで、アメリカがクーラとミーシャを見ながら質問する。

「俺の山で拾った、迷子だ。」

「ちょっと他に言い方があるでしょ！・・・事実だけど」

ミーシャが、怒りながら恥ずかしそうに肯定する。

「リクト殿、そういうのではなくて、馴れ初めを頼む。」

「簡単に言うと、数日前、俺の山で迷子になっていたから、俺の家まで案内して、行き先が一緒だったから、一緒に行動している。こんな感じだな。」

「そうか、そうか、私とともに話してくれるようになるまで、3ヶ月もかかったというのに、私達の出会いが最悪だったのは確かだが、それにしたって……。」

リクトのザックリな説明を聞いたアメリアが、何かに堪えているように身体をブルブル震わせながら、何かをブツブツ呟いている。

「どうしたんだ？アメリア」

「別に、なんでもない。それより、馬車を待たせている。早く行く。」

「わかった」

リクトは、どこことなく拗ねている様子のアメリアについて行く。

「ば、馬車ですか」

「リクトって何者？」

クーラとミーシャは、待遇に驚いているようだ。

四人は、近くに来ていた馬車に乗り込んだ。

馬車の中は、それなりに豪華な作りだった。よく見る大人数が乗るような作りではなく。ソファアが置かれており、精々六人ぐらい

しか乗れない作りだ。

アメリカとリクト、ミーシャとクーラの組み合わせで座った。スレイは、外を併走している。

「アメリカさんは、どうやって、リクトさんと会ったんですか？」

「そうだよ。あんな山奥で暮らしているリクトと、どうやって会えたの？」

二人がリクトに出会ったのは、本当に偶然だった。アメリカまで、同じような出会いかただとは思えなかったのだ。

「それは今から姫様の所に行くのですし、主に聞いた方がいいですよ。嬉々として説明してくれますよ。」

「えっ、これから行く所って、もしかして」

「ええ、王宮のキュール姫様の所ですよ。」

「……………えーーーーー!?!」

5話 1年前のお話

リクト、クーラ、ミーシャはお城の応接室に通され、待つように言われた。スレイは、厩舎でお留守番だ。応接室には、大きめのテーブルと椅子が五脚用意されていた。

「どうしたんだ二人とも？少し落ち着いたらどうだ」

クーラとミーシャが、落ち着かない様子で部屋の中を、ぐるぐる歩き回っている。それに比べてリクトは、椅子に腰かけてのんびりくつろいでいる。

「リクトさん、お姫様なんですよ。王女様なんですよ。王族なんですよ。身分が違いすぎます。」

「気分、悪くなってきた。なんでリクトは平気なのよ？」

「姫さんは、あんまり身分を気にする人じゃないからな。それに、初対面があれだったからな」

「そうだな。私とそなたの出会い、かなり刺激的だったからな」

扉の外から声が聞こえ、声の主が扉をあける。扉を開けて入って来たのは、赤いドレスに身を包んだ長い金髪に碧眼の小さな少女だった。この少女がキュール王女だ。

「久しぶり」

キュール王女は、リクトの言葉に返事をせずに走り出した。そして、

リクトの近くでジャンプして、頭に飛び蹴りをかました。リクトが椅子から転げ落ち、キュール王女を抱き止める形になった。リクトの上で王女が起き上がり

「久しぶりっではないわ！一年間も待たせおつて。」

「悪い悪い。そして痛い」

クーラとミーシャは呆然としながら、その流れを見ていた。キュール王女と一緒に来ていたアメリカも、オロオロして助け起こせばいいのか迷っている。

リクトがキュール王女を持ち上げて立たせる。少しむくれているキュール王女が腕を組んで。

「まあよい、今日は謝礼をするために呼んだんだからな。」

「飛び蹴りが謝礼かと思ったぞ。」

「そんなわけがなからう！」

「それより周りを見てみる。皆、驚いているぞ。」

周りでは女達が、リクトとキュール王女を呆然とした表情で見っていた。

「むっすまぬ。醜態を見せた。私はジルランド王国第四王女のキュールだ。よろしくな」

「よ、よろしくお願ひします。クーラと申します。」

「お、お願いします。ミーシャと申します。」

恐縮しまくっている獣娘の二人。

「そう固くならずともよいぞ。それより、立ち話もなんだし椅子に座ろう。アメリカも座れ」

王女に進められて断るわけにもいかない。全員が椅子に座ると、キユール王女が楽しそうに

「お前達、リクトとの馴れ初めを聞きたくわないか？リクトの奴が言いふらすのを嫌がるから、話す機会があまりないのだ。」

「是非、聞かせてください。どうやって出会ったんですか？。」

ミーシャがリクトの話題に食いついた。

「任せろ、この引きこもりとの出会いを、教えてやろう。」

「「「お願いします。」」」

クーラとミーシャはもちろん、アメリカも興味津々のようだ。ついさっきまで恐縮していたのに現金なものだ。

「あれは一年前のことだ。私が、何者かに誘拐されてな」

キユール王女が、語り始める。

一年前の王都

誘拐されたキュール王女は、南門の近くにある倉庫に縄で縛られて監禁されていた。王女のほかに、商人や冒険者の格好をした男達が6人いる。男達の様子から、外にも何人かいるようだ。

「もう少ししたら出発だぞ、王女様。」

小馬鹿にしたように、商人の格好をした男が王女に話しかける。

「直ぐに我が国の騎士達が、駆けつけるからな。覚悟しておけ」

「残念でした。あんたの国の騎士達は、偽情報に騙されて、北側を探しにいったよ」

「う、嘘だ。そんな簡単にいくか。全ての騎士が北側にいくなど、あり得ん。」

「それが可能なんだよ。なんせ偽情報を流しているのは、なんてったってあんたの婚約者だ。どいつもこいつも簡単に信じたらしいぞ。」

あの侯爵家のボンクラか

「そんなことを、私に話していいのか？」

「問題ねえよ。あんたはこの後で洗脳されるんだからな。」

「なっ何故そのような!？」

自分は、確かに王女だが、王族としての立ち位置は、それほど重要なものではない。その自分に、何故そんな面倒なことを

「あんた、キリク坊っちゃんとの婚約に反対だったんだろ」

「当たり前だ！誰があのようなアホと」

侯爵家長男のキリクは、かなりの問題児だ。領地の娘を拐かしたり、気に入らない者を闇討ちしたり、という噂が絶えない。一度だけ顔を合わせたが、取るに足らない男だったことだけは覚えている。

「王女様の方がそんなんだから、一芝居打つことになったんだよ。婚約者が拐われ、それをキリク坊っちゃんが助けてプロポーズする。洗脳された王女様は、それを受け入れるってシナリオだ。」

「………ッ」

「俺をにらまれてもねえ。悪いけど、そろそろ時間だ。眠って貰おうよ王女様」

男が、薬を染み込ませた布を持って近づいて来る。

「だ、誰か！」

「だから自慢の騎士様は、来ないって言ってたんだろうが。」

「ん〜」

キクールは、薬を嗅がされ意識を落とした。

次に目を覚ました時、何故か拘束されていなかった私は、外から入ってきた男を、思いつき殴った。

拳は当たりはしたが、その腕を掴まれてしまった。その時、男が意外なことを言ってきた。

「いつ痛、・・・ちょ、ちょっと待った。俺はあんたを助けに来たんだ。」

「・・・証拠は？」

「外を見てみる」

キュール王女は、男を警戒しながら馬車の外を見てみる。馬車の外には見ただけで死んでいることがわかる死体が無数に転がっていた。

「うっ」

「すまん、見せるような物ではなかったな。」

思わず口に手を当てた王女を見て、男が視界を遮って外が見えないようにする。

「あれは全部、お前が殺ったのか？」

「・・・ああ」

「その、なんだ、さっきは悪かったな。」

「まあ、お姫様を、助けに来て殴られるとは思わなかったが」

「わ、忘れてくれ」

顔を真つ赤にするキュール王女。

「その、お前、名前は？」

「リクト・タキカゼだ。え」と……」

「キュール王女だ。助けに来た王族の、名前くらい覚えておけ」

普通なら疑われるところだぞ、と内心呆れるキュール王女。

「すまん。口調はこのままでもいいか？」

「構わん」

「それじゃあ、早くこの場を離れよう。」

「何故だ？全部倒したのではないのか？」

「一人逃げられた。確認したいんだが、誘拐の犯人は、姫さんの婚約者の家で間違いないよな」

王女は、この時内心かなりの驚いていた。攫われた自分自身も、倉庫で聞かないとわからなかったのを目の前の男が知っていたのだ。

「そうだが、……何故わかった？いや待て、そもそも何故リクトはこちらに来たのだ？」

「北側にはかなりの数の騎士が派遣されていたから、行く必要がなかったのと、城から王女を攫えるような奴らが、北側に逃げたなんてわかりやすい痕跡を残すとは思えなかったんだ。だから俺は、あなたの婚約者が嘘を吐いていると考えたんだ。そして反対の方角の南に当たりを付けた、後は裏技を使ってこの馬車を見つけたんだ。」

「裏技？」

「それは、後で。まずは、この場を離れよう、侯爵なら、まだまだ私兵を持っているだろうから。街道は使えない。お姫様には悪いが一度森に隠れたいんだが、いいか？」

「構わないが、あれを私の婚約者などと二度と言わないでくれ。」

「わかった。行こう」

リクトとキュール王女が、森に近づいていくと

「いたぞ！あの女を捕まえろ」

十数人の騎兵が、王都とは反対側から現われた。

「遅かったか、話し込みすぎたな。」

「すまん、わたしのせいで。」

「気にするな。走るぞ」

騎兵に近づかれる前に、二人は獣道に入る。奥に進むにつれ、獣道

は道の体をなさなくなり、ドレス姿のキュール王女は思ったように動けなくなり、移動速度が遅くなった。その変わりに話す余裕ができた。

「これから、どうするんだ？」

「仲間が、王都に援軍を呼びに行っている。援軍が到着するまでどこかに隠れる。」

「リクトは、あいつらを倒せないのか？」

「君を守りながらは無理だな。それに敵の数がわからない。」

「そうか」

「よしこの木に登ろう」

「は？」

リクトは、いつの間にか準備していた縄を使って木の上に登っていった。あっという間に登り終った。

その後で、驚いているキュール王女に、縄を絡めて木の上に引き上げる。

登った木はかなりの大木で、下からは枝葉に隠れてリクト達の姿は殆ど見えない。これなら下からは見つからないだろう。

問題は体勢だ。下から見えないようにするために、リクトの腕の中にキュール王女が座るような体勢になってしまっている。

「の、のう、リクト？」

「静かに」

「むっ・・・わかった。」

物心ついてから、異性と触れ合うことなどなかったキュールは、リクトとの密着に結構ドキドキしているのだが、リクトにその様子がないことに気付き、キュール王女は不満を覚える。しかし、今は非常時だから黙ることにした。

「なっなんだ？」

しばらく静かにしていると、リクトとキュール王女が登った木に小動物が集まってきた。その状況に驚き思わず声が出てしまった。しまったと王女が思っていると、リクトも話し出した。

「俺の友達だ。キュール王女を見つける手伝いをしてくれた。それから今は小さな声なら話していいぞ。」

「この子達が裏技か？」

「ああ、人間は、動物のことを警戒しないからな。簡単に見つかる」

「リクトは、動物と会話ができるのか？」

「まあな。」

どこまで不思議な男なのだろう。複数の敵に勝つ力を持ち、偽情報を看破する頭もある。おまけに動物とまで話せる。

キュール王女は、この不思議な男を心底気に入った。なので色々聞いてみることに

「何処に住んでるんだ？」

「なんでそんなことを聞く？」

「ダメか？」

「・・・山奥だ。」

それでは、何処かわからないし、会えない。

「王都に住まないか？」

「興味ないな」

「私は、お前に興味がある」

「動物と過ごしているから無理。」

「むう、何か望みはないのか？」

「のんびり静かに過ごしたい。」

「むっ、なら女に興味はないのか？」

リクトの物言いに、拉致があかないと思い、別の方向から攻めてみた。

「なっ何して」

リクトから驚いた声が出た。キュールが、小さいながらも確かな膨らみのある胸を、リクトの腕に押し付けたからだ。

リクトが顔を逸らす。微かに顔が赤い。

「どうやら興味が無いわけではないようだな。」

女か、それは何故か嫌だ。

「お姫様がそういうことをするもんじゃない。・・・思いついた、キュール王女に頼みがある」

「なんだ望みがあるのではないか。なんだ言ってみろ」

「俺のことは伏せてほしい。」

キュール王女がきょとんとして、質問する。

「・・・何故だ？」

「あまり表舞台に立ちたくない。」

「なら何故助けに来た？」

「俺しかいなかったからだ。」

「私は王女だ。助けられて、何もしないわけにはいかない」

「俺はキュールを助けに來ただけだ。王女だとかはどうでもいい。」

「なっ」

突然キュールが、顔を真っ赤にした。

「・・・そ、そうか、私を助けに來たのか、ならしかたないな。わかった。お前のことは伏せることにしよう。」

何故か、急にキュールが素直になった。

この頃のキュールの周りは、キュールを第四王女としてしか見ない者達がほとんどだった。しかしリクトはキュール個人を助けに來たと言つてのけたのだ。それが、キュールにはとても嬉しく心に響いたのだ。

「なら、私個人の謝礼なら受け取るのだな。」

「まあ、それくらいなら。」

「まずは、私をキュールと呼ぶことを許す。」

「それは駄目だろう。王族を呼び捨てにするのは」

「身内だけの時なら問題あるまい。」

「まあ、そうだが」

「他の謝礼は、また今度だな。」

それからしばらくすると、一羽の小鳥がリクトのところに、飛んで

きた。小鳥が何かをさえずる

「援軍が来た。降りよう。」

「うむ。有意義な時間だったぞリクト」

この後、二人は援軍に合流した。

「とまあ、リクトとの出会いはこんな感じだな。」

キュール王女がそう締めくくった。

「リクトさん、やっぱり凄いです。」

「これで終われば良かったのが、少し続きがある。」

6話 女達の作戦会議

リクトとキュール王女が、援軍に合流しようとした時

「賊め、姫様から離れろ。」

援軍にいた女騎士が、突然リクトに斬りかかってきた。攻撃自体は激情に任せたものだったので、簡単によけることができたが、姫様に続いて援軍にまで攻撃されたことで、リクトはやるせない気持ちでいっぱいになった。

援軍も来たし任せても大丈夫だな、そう判断したリクトは、色々面倒になってその場から逃げた。

女騎士がキュール王女に近づいていく。

「姫様、ご無事ですか？」

「お、おま、お前はアホか！」

助けに来た女騎士をアホ呼ばわりするキュール王女。まあそれもしかたないだろう。

「はい？」

「すぐに追え」

「わかりました。必ずや捕らえてみせます！」

「ええい違う。あやつは私を助けた恩人だ。」

「・・・えっ」

女騎士の顔から、血の気が引いていく。

「王族を助けた者に対して礼もせず、ましてや攻撃したなど我が国の沽券にかかわる。早く詫びに行け。そして私の所に連れてこい、それまで城に入ることを禁ずる。わかったな！」

「は、はい！」

女騎士はすぐにリクトを探したが、その時すでにリクトは援軍を呼んで一緒に戻ってきたスレイと共に、その場から姿を消していた。

ということがあった。

「何を隠そう、その時リクトに斬りかかったのがアメリカだ。」

「し、仕方ないじゃないですか、一角獣ユニコーンの主が男だとは思わなかったんです。」

気まずそうにするアメリカ。王都に援軍を呼びに来たのは一角獣のスレイだった。一般的に一角獣は男を毛嫌いする聖獣だ。そのためアメリカはスレイの主を女と決め付けていた。そのためアメリカはリクトのことを賊と勘違いしたのだ。

「そういえば最近復帰したって、転移門にいた騎士が言っていましたね。」

「ああ、リクト殿を見つけるのに半年、スレイ殿に許して頂くのに

1ヶ月、リクト殿とまともに会話ができるようになるのに3ヶ月、王都に来てくれるよう説得するのに1ヶ月かった。この頃には入城を許されていたよ。さらに1ヵ月後に王都に来てもらうことができた。」

「全く、自業自得だ。」

「姫様だつて、リクト殿を殴っていたではありませんか」

「うぐつ、た、タイミングだタイミング。お前のタイミングは最悪だった。」

「あんなところに住んでいるリクトさんを、どうやって見つけたんですか？」

「確かにリクト殿を見つけるのは骨だったよ。私はまずリクト殿の目撃情報を集め、あの山付近と当たりをつけて張っていたんだ。幸いリクト殿の両腕に巻いている黒い包帯は目立つから、情報はすぐに集まった。だが、あんな山奥に住んでいるとは思わなくてな。的外れなところを張っていたから、半年もかかってしまったよ。」

「大変だつたんですね」

「確かに大変だったが、リクト殿が山奥で過ごす姿は何かというかととても良かった。」

「ああ、それはわかるなあ」

「私も同意です。動物と戯れるリクトさんの姿は、グッとくるものがありました。」

「まだまだですね。リクト殿は、物を作っている時の楽しそうな顔こそが」

「ええい、私が見に行けないことへの当てつけか」

リクトの話で盛り上がる三人の姿にキュールが頬膨らませている。リクトは三人の会話を聞き居心地が悪そうにしている。

「そんなことより、リクトへの謝礼の件なのじゃがな。そのくちな、王都に屋敷を建ててみた。動物も一緒に住めるように、敷地をかなり広きして庭も広く作ったのだが・・・どうだ？住んでみないか？」

一度王都に住むことは断れたが諦めきれず、動物と一緒に住めるようにリクト専用の屋敷を建てたらしい。キュールは、一度断られているからか、少し気まずそうに言ってきた。

「・・・どうしてそこまで？割に合わないだろう。」

「私はリクトが気に入ったのだ。王都で暮らしていれば会うことの可能になるだろう。」

「人間が多いところは苦手なんだ。」

「アメリカにも最初はそう言って王都に来ることを断ったそうだな。私とは会いたくもないのか？」

不満そうにするキュール王女に、リクトは慌てて弁明する。

「そんなつもりはない」

「スレイさんが、主は人間不信だと言っていました。昔、何があったのですか？」

「俺は………」

リクトはしばらく黙っていたが、女達がじっと待ちの体勢を崩さない様子にリクトのほうが先に折れた。

「俺は……異世界から来た」

「……それで」

キュール王女が先を促す。

「信じるのか？」

思い切った告白をあっさり流されて、リクトの方が驚く。

「お前がこの場で冗談を言うとは思えん」

「私も信じます。続けてくれませんか？」

「……わかった。俺は前の世界で……化け物と呼ばれていた。」

「化け物？どういう意味？なんでリクトが、わけわかんない！」

リクトのために怒ってくれるミーシャ。

「俺は、昔からある『力』を持っている。それが原因で俺は化物と呼ばれ、小さい頃から一人で生きてきた。だから人の輪の中にと、違和感を感じて落ち着かないんだ。」

「力なんて使い方しだいだろう」

キュールが、スレイが昔口にしたことと同じことを言ってくれる。しかし、今回のリクトはそこで止まらなかった。

「俺は命を救った人間に命を狙われたことがあるよ。後で聞くと俺が怖かったそうだ。」

「そんなの・・・酷い」

「私達のこと信じられませんか？」

ミーシャが悲しそうに顔を歪ませ、クーラがリクトに問いかける

「わからない。だけど昔、一人だけ俺のことを受け入れてくれた人がいたんだ。俺に武術を教えてくれた人で、俺の恩師だった。けど恩師は、俺が原因で死んだ。それから誰かと長く関わらないようにしている。」

「そんなの・・・悲しすぎます。」

「もう慣れた。」

そう言うリクトの顔は、とても慣れた顔には見えなかった。疲れたような、諦めたような表情だった。

「リクト」

「なんだ？」

「今から作戦会議をするから、ちょっと外で待っていてくれ。」

「は？」

「いいから外で待っている！」

「わ、わかった。」

「逃げるなよ！」

キュール王女の突然の提案と剣幕に驚いて、リクトは素直に部屋の外に出た。

リクトが外に出た後の部屋では、女達で話し合いが行われていた。

「どうしたらいいと思う？ クーラとミーシャも意見を聞かせてくれないか。」

「私はリクトに付きまとうよ。絶対に一人になんてしない。」

そうミーシャが息巻くが

「それではリクト殿は山奥に戻ってしまう。それに人間不信は直らないだろう。」

「・・・そうだよねえ」

「やはり、『力』とかいうものを見せてもらうしかないのではないか？」

「絶対対見せたがらないと思いますよ。それにどんな力かもわかりませんし。」

「「「・・・」」」

部屋を沈黙が満たす。

「リクト殿に、人の中で過ごしてもらうのは無理なのでしょうか？」

「そもそも私達の我が侘みたいところがあるからなあ」

部屋の空気が重くなる。そこにクーラが

「私はそこまで悲観してはいませんよ。」

「どうしてよ？」

「ミーシャ思い出して、今度リクトさんと一緒にギルドの依頼をする約束をしたでしょう。」

「そういえば」

ようやくミーシャも思い出したようだ。

「リクトさん、本当は人との繋がりを求めているんだと思うんです。」

少なくとも人が恋しくなることぐらいはきつとあります。」

「確かに、そうじゃないとリクトから誘ってくるはず無いもんね。」

クーラの言葉に、ミーシャは得心がいったようだ。

「……そうだ！その一緒に受ける依頼の内容は決まっているのか？」

キュール王女の顔に笑みが浮かぶ。なにか良いことを思いついたようだ。

「いいえ、それはまだ」

「それならこういうのはどうだ」

思いついたことを三人に話す。

・
・
・

「いいですね。それでいきましょう」

「それなら何とかなりそうね。」

「少なくとも時間は稼げるはずだ。」

「そうだろう。根本的な解決にはならないが、やってみる価値はある。四人でリクトの人間不信を直すぞ！」

「「「はい！」」」

リクトのことを思い、四人の女達はここに団結した。

7話 城塞都市を目指して

なんでこうなった？

俺は今、クーラ、ミーシャ、キュール王女、アメリアに俺を加えた五人で、西の国境付近にある城塞都市ロディンを目指していた。城塞都市ロディンは国境の近くにあるためかなり遠い、しかも移動方法は歩きだ、かなりの日数がかかることが予想される。絶対に時間稼ぎだな。こんなことになったのも

「リクト、お前クーラ達と依頼を受ける約束をしているようだな。その依頼内容が決まったぞ。」

そしてキュールが言って説明された依頼内容は

依頼 ロディン街までの護衛

依頼ランク B

種別 護衛

報酬 金貨6枚

内容 女性二人の護衛。行き先はロディン街と王都を往復。日数は未定。なお、依頼の間は女性二人を含んだ飯のチームとして行動すること。転移門は使わない。行きで金貨三枚、帰りで金貨三枚。

という内容だった。リクトは断ろうとしたが

「お願いします、リクトさん。一緒に受けてください」

「お願い」

クーラとミーシャに頭を下げをお願いされ、それをリクトは跳ね除けることができず、この依頼と一緒にすることになったのだ。

「リクト、この依頼の間、私は王女ではなく貴族の娘ということになっている。だから気兼ねなくキユールと呼べ。わかったか？」

「ああ、わかった。それよりよく旅を許してもらえたな」

「私は妾めかけの子だからな、あまり重要視されておらん。それに父上は私に、あのボンクラと結婚させようとした負い目がある。そこを少し突いてやった。」

「王様も大変だな」

「まあな。それに父上は、あまり有能ではないから、他の事でも色々苦労しているようだ。ふんっ、もっと苦労すればよいのだ自業自得なのだからな」

「そうなのか？」

「この前、西の隣国、トライス国が大飢饉に襲われたのだが、父上は他国と同じくらいしか援助を出さなかったのだ。」

「それに何か問題があるのか？」

「トライス国は、山に囲まれていて我が国以外からの援助が難しいのだ。それを大臣が他の国の例を出して援助を控えるように言われると、あっさり援助を減らしよったのだ。おかげで今まで良好だったトライス国との仲は、今や最悪になってしまった。」

「進言しないのか？」

「女は国政に口を出せんのだ。」

「それじゃあ、今回の旅はもしかして」

「ああ、できればトリス国の現状を確認したい。」

「キュールは偉いな」

リクトが頭を撫でると、キュールは頬を染めて下を向いてしまった。

「リクトは唯一の男なんだから、私達の相手もしなさいよ」

キュールがおとなしくなった事で、ミーシャが絡んできた。確かにリクトは、女四人の中に男一人だ。スレイは、動物達に帰りが遅くなることを知らせるため、一度リクトの家に戻ってもらった。

「リクト殿、良ければステータスカードを見せ合いませんか？」

「まあ、仮にもチームだからな。構わないぞ。」

「それでは、『カード・オープン』どうぞ」

「仮にもは余計だ。『カード・オープン』ほれ」

アメリアとキュールがカードを渡してきた。そのカードを受け取って

「『『カード・オープン』』」

リクト、クーラ、ミーシャのカードを、キュールに渡す。

キュール・ジルランド

LV10

種族 人間 女

クラス 王女

筋力 15

耐久 14

敏捷 15

知覚 26

魔力 35

職業 王族

技能 中級雷系魔術 初級水系魔術

装備

雷水の指輪

ダマスカスの短剣

高級な服

良皮の靴

アメリア・リプレーン

LV21

種族 人間 女

クラス 騎士 剣士 魔法師

筋力 53

耐久 57

敏捷 43

知覚 28

魔力 40

職業 近衛騎士 冒険者

技能 中級剣術 中級風系魔術
装備

ダマスカスの剣

耐火のマント

鉄の鎧

良質な服

良皮の靴

アメリカは結構強い。この国の一般兵のレベルは8〜12くらいだ。その中で21というのは高い。キュールのレベル10も、王族の女にしては高いほうだろう、たぶん。

「レベル12！？リクトこれは本当か？」

「ああ、そうだぞ」

「レベル12で私を助けた時の敵の数を倒せたとは思えない。あの時、『力』とやらを使ったのか？」

「ああ使った。『力』は普段は封印されているから、その数値に偽りは無いぞ。」

「寝ていたのが悔やまれるな。」

もし戦いを見ることができていたら、色々と解決していたかもしれない。

「それよりこれからどうするんだ。このままロディンを目指しているのか？」

「ん〜、私はリクトに、もう少しレベルを上げてほしい」

「・・・なんでだ？」

「えっ、な、なんとなく、リクトには強くいてほしいというか、私の中でリクトは強いイメージがあるというか」

キュールの本音は、レベルが高い方が自分の傍に置きやすいからだ。それを本人に言うわけにはいかなかったため、キュールの返答は曖昧なものになってしまい

「とにかく、次の町に着いたら、冒険者ギルドに行くぞ。」

結局ごまかした。

「まあ、それは構わないが。強いに越したことはないし、お金も必要になるからな。特にクーラとミーシャは」

「あはは〜」

「すみません」

次の日の昼頃に、ノルディという町に着いた。ノルディは、これとって特徴のない町だが、王都に近いため、それなりに栄えている。

町に着くと、すぐに冒険者ギルドに向かった。今はキュールが、ギルド登録をしている。国や他のギルドが出す依頼は、条件さえ満たせば誰でも受けることが可能だが、冒険者ギルドの依頼を受けるには冒険者にならないといけない。

登録はタダで、冒険者ギルドの収入は依頼の仲介料が基本になっている。そのため冒険者ギルドは優秀な人材の確保に必死だ。

「終わったぞ。」

登録を終え、走りよってきたキュールが、ギルドカードを見せてくる。カウンターのの方を見ると、ギルドの受付嬢が涙目になっている。この世界では、ステータスカードという身分証明があるから、身元がすぐにわかってしまう。キュールが王族だと知って緊張したのだろう。

冒険者カード

名前 キュール・ジルランド

所属国 ジルランド王国

チーム なし

達成依頼

S 0 0 0 A 0 0 0

B 0 0 0 C 0 0 0

D 0 0 0 E 0 0 0

受注中依頼

なし

今のチームは仮なので、表記はされない。

「お主達も見せてみよ」

キュールにギルドカードを渡す。

冒険者カード

名前 リクト・タキカゼ

所属国 ジルランド王国

チーム なし

達成依頼
S 0 0 0 A 0 0 1
B 0 0 0 C 0 1 7
D 0 1 5 E 0 2 2
受注中依頼
なし

冒険者カード
名前 クーラ・ポートレアモン
所属国 ジルランド王国
チーム なし
達成依頼
S 0 0 0 A 0 0 0
B 0 0 0 C 0 0 0
D 0 0 7 E 0 2 2
受注中依頼
なし

冒険者カード
名前 ミーシャ・ミレンツ
所属国 ジルランド王国
チーム なし
達成依頼数
S 0 0 0 A 0 0 0
B 0 0 0 C 0 0 0
D 0 0 7 E 0 2 4
受注中依頼
なし

冒険者カード

名前 アメリカ・リプレーン

所属国 ジルランド王国

チーム なし

達成依頼

S 0 0 0 A 0 0 0

B 0 0 8 C 0 3 3

D 0 2 1 E 0 0 7

受注中依頼

なし

「リクト、Aランクの依頼を受けたことがあるの？」

「ああ、冒険者ギルドの依頼じゃなかったがな。」

達成依頼数は、基本的に冒険者ギルドで受けた依頼しかカウントしないが、申請すれば他の所の依頼もカウントすることができる。リクトのAランクの依頼は、依頼主が勝手に申請したものだ。

「よし、次は依頼だな。何がいいと思う？」

「姫様それなら」

「アメリカ、今は貴族の娘だ。せめてお嬢様くらいにせよ」

「わかりました、お嬢様。」

「それで何がいいのだ？」

「皆さんの腕を試すためにも、討伐系の依頼がいいのではないでし

ようか」

アメリカのこの言葉で方向性が決まり。最終的に決まった依頼は

依頼 ゴブリン討伐

依頼ランク D

種別 討伐

報酬 半金貨5枚

内容 ゴブリン200体の討伐、早期解決を所望、場所はゾル森林、
カウントカードを使用

というものだった。アメリカには、物足りないかもが、そこは我慢
してもらうしかない。

半金貨5枚が単純に計算すると一人半金貨1枚だな。金欠のクーラ
とミーシャには、ちょうどいいだろう。カウントカードとは、討伐
依頼でよく使われるもので、設定された魔物を倒すと、倒した数が
カウントされていくカードで、討伐数の証明になる。

カウントカード

討伐者 リクト

討伐指定 ゴブリン

討伐数 000

という仕様だ。

「キョール達は、お金は持ってきたのか？」

これから当分は一緒に行動するのだから、少々気になったのだ。

「いや、あまり持ってきていない。アメリカと合わせて5千コニー

くらいだな。なぐに、途中で稼げばいい」

どうやらキュールは元から、依頼を受けるつもりだったようだな。

「さあ出発するぞ、リクト。」

キュールはとても楽しそうな顔で、ゾル森林に向けて歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7694y/>

黒い刺青

2011年12月5日22時49分発行